

堆肥わくわく運動の生ごみの堆肥化のポイント

1. 「生ごみ蓋付き堆肥箱」と「堆肥框(わく)」の二つを使う。

生ごみの発酵を早め、悪臭が発生しないように、「生ごみ蓋付き堆肥箱」と「堆肥框(わく)」の二つを使う。「堆肥框」では、落ち葉などの堆肥材料を、ある程度、堆肥化しておく。

《生ごみ蓋付き堆肥箱》



《堆肥框》

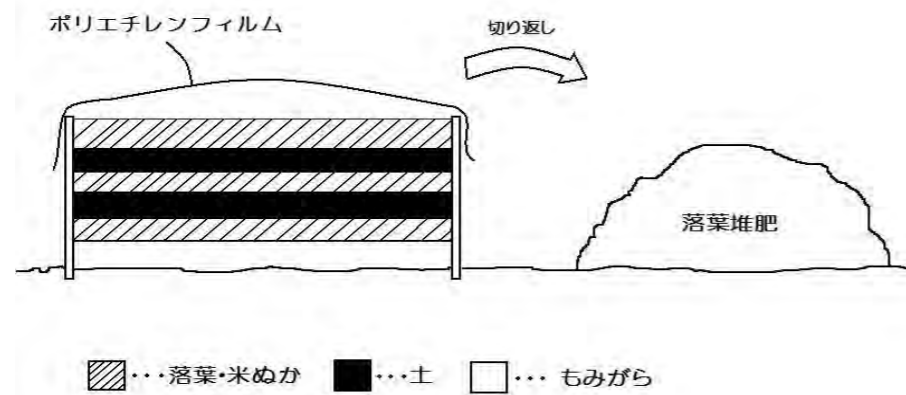
2. 「落ち葉堆肥」をつくる

堆肥框を使い、落ち葉を主体に、もみ殻、ワラ、米ぬか、雑草など、悪臭を放ちにくい材料に適度な水分を与え、分解発酵中の堆肥をつくる。これは、ここでは「落ち葉堆肥」と呼んでいる。

積み込み後、2～4か月で堆肥となる。好気性発酵にするために、2～3週間に一回くらい、切り返しを行う。切り返しは、木框を持ち上げてはずし、隣に据え、積み込んでいた堆肥材料をフォークやスコップで再び積み込み直す。

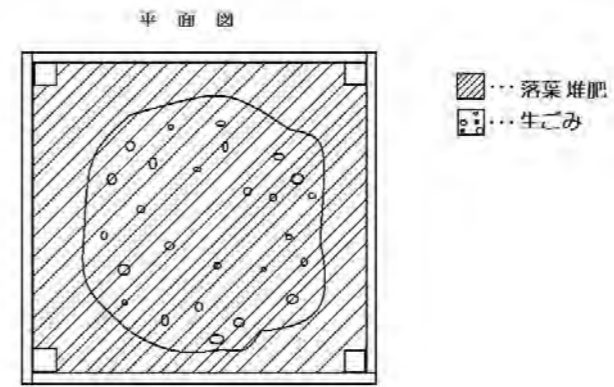
慣れてくれば、また、農家の場合、家畜糞尿、ペット糞尿、作物くずなど、植物質、動物質の有機物を積み込むことが可能である。

《堆肥枠断面図》

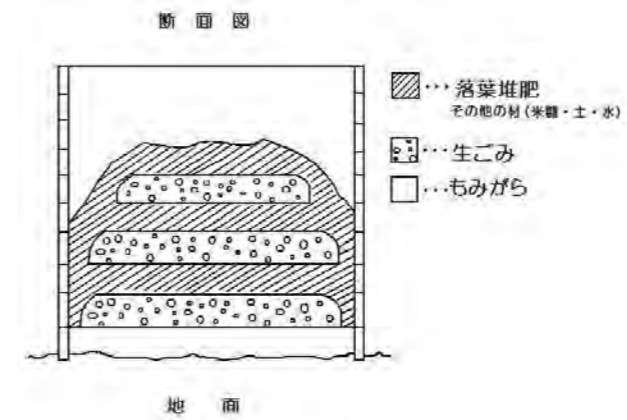


3. 「生ごみ蓋付き堆肥箱」を使い、生ごみを堆肥化する。

《生ごみ蓋付き堆肥箱》



《生ごみ蓋付き堆肥箱》



・作り置きしておいた「落ち葉堆肥」に生ごみを包み込むようにしながら投入する(平面図参照)。

・側面の板には生ごみが触れないようにしながら(臭いがもれないように)、平らになるように積み込む(平面図、断面図参照)。

・窒素分(N)の多い魚・肉類と炭素分(C)の多い野菜類との比率により、できる堆肥のC/N比が異なる。窒素分が多いと発酵温度も高く、肥料成分も高いが臭いも強い。炭素分や土の投入でほどよい堆肥づくりをめざす。

・毎日の生ごみ投入で箱がいっぱいになってきたら、箱を上になんげ持ち上げる。

・低温期には、発酵分解が遅くなるので、堆積初期から発酵分解が進むよう、米ぬかを投入して発熱を促すなど工夫が必要。(電熱線や火力などの熱源は用いない)



・蓋付き堆肥箱内部

生ごみが落ち葉堆肥で包まれている



・堆肥框の切返し作業

堆肥材料を框に積み込む